

遺された手紙

西 成彦

連続講座「国民国家と多文化社会」も第17シリーズを数え、「帝国の孤児たち——20世紀の日本語作家」と題した本シリーズも、今日で最終回を迎えることになりました。この連続講座の中で文学に特化した組み立てを考えたのはこれがはじめてです。日本の国民国家形成、植民地主義をとらえる時、その総体をまとめて採り上げることは難しかったので、これまでは、ある時は沖縄、台湾、というふうによりエリア単位、もしくは先住民といったより大きく普遍的な課題設定の中でとりあげてきました。しかし、それだと日本植民地主義の全体像がどうしても見えにくくなります。そこで、今回はむしろ文学に特化してエリアを横断する形をとらえてみようと考えた次第です。

今回、この「帝国の孤児たち」というタイトルを確定させる前、中川所長と打ち合わせを重ねたのですが、私はここ数年間、「アドプション」adoptionという言葉にこだわりをいだけてきました。「借用」とか「養子縁組」といった意味あいの言葉なのですが、私がこの言葉に注目することになったのはジョゼフ・コンラッドがきっかけでした。中央アフリカに渡ったヨーロッパ人の凄絶な最期を描いた『闇の奥』*Heart of Darkness*が突出して有名ですが、コンラッドはもともとはロシア領ポーランド出身で、英語は後天的に身につけた言語でした。その彼が『個人的記録』という自伝エッセイの中で語ったことなのですが、彼は「どうして英語で小説を書くのか？」という質問を受ける。「あなたはなぜ英語をアドプト（採用）したんですか？」というわけです。それに対してコンラッドはこう切り返すんです。「英語が私をアドプトした（養子に迎えた）のだ」——要するに、自分の主体的な選択がそうさせたのではなく、いつのまにか英語で書くようになったということなのでしょう。「アドプト」adoptという動詞をもの見事に裏返す格好で、英語作家ジョゼフ・コンラッドの誕生を言い表した言葉だと思います。それを読んだとき、ハッとしました。多重言語使用者は、エリートであるが故にそうになってしまう場合がありますし、何らかの政治的な難民、亡命、移民ということで不可抗力によって多言語使用者が生まれてしまうケースもある。それこそ、多言語使用者のできかたは千差万別です。しかし、そういう作家たちが、ある言語でものを書く、その時に書かれた言語以外の言語のざわめきや、痕跡をあえて封印して抑圧するのではなく、そのざわめきとともに自分の作品の全体を伝えようとするような書き方をつかみとるようになる。それがちょうど19世紀、コンラッドの時代以降です。

もちろん、近代以前のヨーロッパではインテリは誰もがポリグロットでしたし、日本を考えてみても、『古事記』、『古今集』、すべてが和漢バイリンガリズムの産物です。しかし、それはあくまでもエリートに特化した多重言語使用であって、難民、亡命、移民も含めたマスでの人間の移動経験をすくいあげるような文学の必要性が追求されるようになるのは、やっぱり19世

紀ですね。

エドガー・アラン・ポーに『モルグ街の殺人』という作品があります。19世紀の首都であるパリで起こった殺人事件は、オランウータンが犯人だったということで話は一件落着するんですが、はじめ怪しまれるのはみんな、外国人たちばかりでした。しかも事情聴取すると自分とは違う国籍の人ことを犯人だと互いに言い合うというかたちです。ポーの先見の明というか、多国籍、多言語的なパリを推理小説の形で書いたのが『モルグ街の殺人』だったわけです。パリのパリらしさをこのようにして描き上げる小説が、フランス語ではなく、英語というパリの外国人の言語で書かれたということじたい、じつに象徴的ですが、国民文学の最盛期であった19世紀は、同時に、地球上のここかしこが多言語性の刻印を決定的な形で受け止めることになったそのような時代であったということなんですね。ヨーロッパの周縁である旧植民地地域がそうであったように、それら植民地帝国の首都もまた無国籍化に身をゆだねるしかなくなっていく。そして、そうした後戻りしようにもできない歴史的なプロセスを描くのに、とつぜん、ひとりの作家が、いや一人の越境者が作家として「アドプト」される。ポーの場合は、合衆国生まれの英語作家がいきなりフランス文学の巨匠としてそれこそ拉致されるような事態が生じるわけです。その後、フランス文学はフランス語を母語とはしない作家たち、さらにはフランス語ではない言葉でパリを描いてしまうような作家を抜きにしては語りえない雑種性を引き受けることになるわけです。

そして、こうした「拉致」というか、「養子縁組」に相当するアドプションは、言語的なアドプションをも当然のことながら引き起こすわけです。単なる同化や洗脳の産物ではなく、ある言語が一人の外国人を作家として抜擢・登用する形で実現してしまう。コンラッドの身に起こったことは20世紀に入るともっともっと多くの作家たちの身に運命としてふりかかることがらでした。

「アドプション」というキーワードを近代以降の日本文学、日本語文学を考えるときにも導入できないものだろうか？ 今回の連続講座では、明治以降の日本語表現者の中から、「養子」「養女」としか言いようがなく、であればあっただけまさに稀代の日本語使いとして高い評価を受けることになった二人を取り上げる形で、司会およびコーディネータの役目を引き受けることにしました。

ひとり、初回に取り上げたアイヌ出身の表現者、知里幸恵です。知恵幸恵は岩波文庫でも出ている存在なので知名度も高く、都合がいいということが最初にありますが、それだけではありません。知恵幸恵は1903年、北海道にアイヌの血を引く女性として生まれ、幼い頃に洗礼を受けてパチェラーという西洋人の影響も受け、日本の学校に通ってきれいな標準語で書いたり、しゃべったりする力も身につけた。トライリンガルと呼ぶのはいかばかりかもしれませんが、ローマ字も使えるバイリンガルで育っていたのを、たまたま金田一京助によって発見され、彼女によってアイヌのフォークロアがローマ字化され、それによって彼女自身による日本語訳がつけられる『アイヌ神謡集』というバイリンガルテキストが生まれるわけです。1923年の刊行でした。

彼女はバイリンガルであるが故に重用された人です。彼女を日本文学史の中にどう位置づけるかという問題は、日本文学研究者がまだ十分に手がけていない領域です。知里幸恵は日本の

アカデミズムによって「養女」として囲われ、しかも東京の金田一の家で病を発病して北海道に同じアイヌ系の婚約者を残しながら、なんと19歳の若さで亡くなってしまった。今日はこの彼女を取り上げた勢いといいますか、その残響の中で、もうひとりの、やはり東京で客死することになった日本語作家、李良枝を取り上げようと思うわけです。

李良枝は生まれも育ちも日本ですが、1955年生まれの彼女は1980年に韓国を訪問して以降、母国語を習得し、韓国の古楽器に習熟し、舞踊を習ったりして、ソウルに活動の拠点をおくこととなります。その後、日本に戻ってきたいわば帰省中に発病して、1992年、37歳の若さで亡くなりました。

彼女は今、在日作家というくくりに属する作家です。このくくりの中には一世、二世、三世、さまざまなタイプの男女が存在していますが、在日作家とはこういうものだという典型はどこにもありません。一つの格言にしていきたいと思います、マイノリティこそが個別的でシンギュラーな存在であって、一般化することが難しい。逆にマジョリティの方が、一般化が可能な行動パターンをとってしまうという皮肉な定理みたいなものがあります。ともあれ、在日作家と呼ぼうが、日本語作家と呼ぼうが、彼女は どうしたって型破りな作家だと思います。

李良枝の作品は、その多くが韓国を舞台にしている。彼女にとっての在日性はそういう意味でアンビヴァレント、在日として生まれ育ちつつも、あえてソウルに自分のベースにおいて、しかも日本語で書き続けた作家です。かりに「養子」という概念を持ってくるとしても、李良枝の場合は、まず在日朝鮮人として育ったところでの養子性と、その在日として育った彼女が韓国に行ってふたたびアドプトされていく。要するに二重の養子性を考えないわけにはいかない。その彼女が日本に戻ってきて、そこで命を落としてしまう。これを客死といってしまうよいかどうか。

実は、私と同年生まれの彼女の存在を私が見つけたのは1983年のことでした。81～83年までポーランドに留学して戻ってきて、たまたま友人から「中上健次に会わせてやる」と言われ、一度だけ会う機会がありました。「ポーランドから戻ってきたばかりの西です。半分、ポーランド人みたいなものです」と言っただけに、心に残ったことがあって、一つは「君は、アイザック・バシェヴィス＝シンガーを知ってるよね」。ワルシャワに生まれ育ったイディッシュ語作家で、ホロコーストの前にアメリカに渡って、その後もずっとイディッシュ語で書き続けて、イディッシュ語の作家としては唯一ノーベル賞をとった作家です。受賞は1978年のことでした。まさにゲットーの中で生まれ育った自分の幼少時代が根っこにあって、どこにあらうと、いつまでも過去の根っこにこだわって書き続けた人なんです。これは中上健次のものというか、紀州と東京の間を歩き来し、さらには韓国にも足を伸ばした彼にとってバシェヴィス＝シンガーはほとんど兄弟のような、お父さんのような作家だったのだと、その一言から感じ取った次第です。

それからもうひとつ、「去年の『群像』に書いた李良枝を知ってるかい?」。ワルシャワ帰りの私には初耳でしたが、『ナビ・タリオン』（1982）のことでした。留学から戻った僕にとって『ナビ・タリオン』は留学小説、留学生にとって留学している時間よりも留学する前の時間が、いかに留学時代を規定しているかということを実際に思い起こさせてくれるような作品として読みました。自分にとって異言語であるものの中にどっぷり漬かっている時に自分にとって

一番身近な言語がどんどん壊れていく感覚。おかげで、在日朝鮮人の「ウリナラ」発見の物語としてしか李良枝が読めないとは考えもしない形で『ナビ・タリョン』以降の作品にも出会うことができました。中上健次さんのおかげというのも何ですが・・・

ただ李良枝は女性であって私は男だった、その差はたしかに決定的でしたね。彼女は「刻」という小説を1984年に書いています。女性でなければ書けない、すごい描写が出てくる小説ですが、その中にバーニバルビ、これはスウィフトの『ガリバー旅行記』に出てくる国の話です。その国では言語は必要がない。言語はものを表すのであって、ものを見せれば済むことであって言葉なんかいらんないじゃないか。ところがバーニバルビの女たちはおしゃべりが大好きで「言語がいらんないなんて言わないでくれ、私たちは舌の喜びが大事なんだ」という場面を李良枝はこの小説の中で引いています。李良枝は、言葉をしばしば特別のオブジェとして使う。彼女の『由熙』の序文の中で彼女は言葉について「杖」という言い方をしていますが、足とは別の手の代わりにもなるような杖としての言葉を強く意識していると思います。

ここでの彼女は言葉のことに触れているのですが、『ガリバー旅行記』はご存知のように、主人公のガリバーが、ある時は小人の国、ある時は大人の国、ある時は空中の島ラピュタ、あるいは馬の国、ヤフーの国に行ったり来たりする話です。スウィフト自身がアイルランドのダブリン生まれでイングランドとアイルランドを行ったり来たりする中から、移動に伴う錯覚や精神の屈折、鬱屈を投影して書いた戯画的な小説です。李良枝にとって玄界灘を行ったり来たりする経験がスウィフトにとってのアイルランド海を行ったり来たりする経験と重なっている証拠かなと思いました。

花田清輝が面白い謎かけをしています。ガリバーが国に戻った際におもわず英国人を踏み潰しそうに感じたことがある。これははたして小人の国からの帰りだったのでしょうか。それとも大人国からの帰りでしょうか。

李良枝の渡った1980年代と比べると、玄界灘を超えて行ったり来たりする人間の数は双方向で急速に増えています。1945-48年以前の日本と朝鮮半島の間の移動とはかなり異質な形で日本人や韓国人の往来が行われているわけです。

今日、お話をいただくトップバッターは藤井たけしさん。それこそ玄界灘を幾度となく往復されている現代の李良枝の一人といってもよいと思います。つづけて、立命館大学の博士課程在籍中で韓国留学中の寺下浩徳さん、さらに2年間に及んだ留学を終えて、いまは京都にしばし腰を落ち着けておられる金友子さんの順でお話させていただきます。それぞれの往来体験なども交えながら話していただければと思います。そして、最後に京都大学から現代アラブ文学研究者の岡真理さんにお越しいただいています。岡さんにはかつて国際言語文化研究所の10周年企画をもとにした論集『20世紀をいかに越えるか』のなかに『由熙』論を寄せていただきました。同じ論文は『棗椰子の木陰で——第三世界フェミニズム』（青土社）にも再録されていますので、ぜひとも再確認いただければと思います。

それでは藤井さんからどうぞお願いいたします。